

授 業 レ ポ ー ト

歯学部 歯学科 [6年制]

保存修復学
3年次 必修

今回のレポーターは

左から、審美歯科でキレイづくりをめざす菅原いつみさん(立命館慶祥高校出身・編入)、最近矯正歯科に興味が出てきた若林梨絵さん(立命館慶祥高校出身)、歯科技工士資格保持者でインプラント技術マスターが目標の佐藤佑哉さん(釧路江南高校出身・編入)の3名です。



3年次、楽しみにしていた臨床系実習開始！ 抜群のリアリティで虫歯治療を学びます。

最初の臨床系実習。

歯学部では3年次に治療技術を学ぶ臨床系基礎実習が始まり、むし歯を削り詰め物をする「保存修復学実習」と、クラウンやブリッジを作る「歯冠補綴学・橋義歯補綴学実習」がそれぞれ週1回、各240分以上あります。

きょうは午前中から夕方5時まで「保存修復学実習」。午後は、人工歯を削って、う蝕(むし歯の部分)を除去、その過程で露出した歯髄を保護して、最後に詰めるという一連の流れの実習です。保存修復学実習は残すところあと1回、試験だけ。つまりきょうの実習は3年次では最高の難易度といえるわけです。

上達がわかる喜び。

治療するのは左下5番・第二小臼歯、う蝕付き人工歯です。人工とはいえ、う蝕部分は本物同様、検知液に赤く染まります。ここをエアタービンで残さず、かつ最小限の範囲にとどめて削ります。絶妙な力加減は体で覚えるしかなく、最初は削った表面がひどいでこぼこ(苦笑)。でもいまは随分と上達しました。



誤飲を防ぐために、治療する歯だけ出して口の周囲をシートカバー(ラバーダム装着)。ネイルアートで見せる細かな技と集中力が自慢の菅原さんにも「歯は凹凸があるから難しい」と言わせる治療前のハードルです。

最も大切なことを…。

さて、一連の治療の流れを実習する場合、意外に高いハードルが器具の準備です。エアタービンのハンドピース、詰め物のセメントを練るスバチュラー、削った穴の底と穴全体で異なるセメン



最初にVTRのデモンストレーションを担当した先生自らが実習内容を説明します。各学生のモニタに映る高画質映像でミリ単位の指示もはっきり。もちろん、授業以外でも自分の習熟度に合わせて必要なデジタル教材を使って予習・復習が可能。つまり「できない」なんて言い訳は通用しない環境なのです。

トの粉と液など、各過程で使用するものの選択、扱いに神経を使います。

きょうも誰もが最高の集中力をキープして臨みましたが、1本の歯の治療に午後いっぱいかかりました。セメントを適度な硬さに練るのに苦労していた私たちの耳に届いた先生のひと言は「マネキンは口を開けたまま、いつまでも待ってくれるけどね」。ドキリ!まだまだ自分のことだけで精一杯でした。

甘えは封印します。

この実習には年に7、8人、本学卒業生が非常勤講師としてやって来ます。きょうは青森県おいらせ町から開業医、本学大学院修了の歯学博士で日本歯科保存学会専門医の今北将人先生が足を運んでくださいました。今北先生の時代には、いま私たちが実習台のモニタで自分のわからない部分を何度も繰り返し再生できるVTRも全員で1度見るだけ、その場で頭に叩き込まな



8~10名に一人の教員が実習中ずっとそばにいるから、疑問はその場で解消!すぐ次に進めます。「ダメ出しも厳しいですけど…」

ればならず実習室はピリピリした緊張感に包まれていたそうです。

振り返ると、何でも揃った実習台、質感もリアルな人工歯、頻繁にバージョンアップされる本学教員製作オリジナルデジタル教材、全国でも群を抜く恵まれた環境に甘えていた私たちがいました。「もっと緊張感をもってください」。先輩のエールを胸に、この環境に恥じない歯学部生になれるよう精進します!

担当教員より

基礎科目の復習が大事です!

● 齋藤 隆史 教授

本実習は、う蝕を除去して歯科材料で修復するという歯科医師の基本技術を身につける基礎的な実習です。臨床系基礎実習としては最も早期(第3学年前・後期)に行われるため、学生さんたちにとっては「歯科医師に一步近づいてきた」という実感が湧く実習であると思います。そのため、学生さんたちのモチベーションを高める実習内容、教材作りを目指しています。学生さんたちへのアドバイスとしては、本実習はこれまでに学んだ「歯の解剖学」「歯型彫刻」「歯科理工学」をはじめとする様々な基礎科目を基盤として成り立つ実習ですので、まずそれらの知識・技術が身に付いていなければなりません。このことを念頭に置き、基礎科目の復習を十分に行ってから本実習に臨んでいただきたいです。